

生活から生まれる良質な環境デザインの研究 英国田舎町の環境デザイン

Research on Quality Environmental Design Which Grows out of Daily Life.
Environmental Design in Rural England.

小林 令明
Reimei Kobayashi

ABSTRACT

In the long history of the rural town of Cotwolds, England, a good environment has been formed by those who live there, and a richness of life is felt by visitors. The author analyzed (1) this richness of life as it relates to environmental design, as well as (2) what are the "actions of the creating hands" (work of local people) vis-a-vis the "development of a visual effect," and through this (3) the "facts." This work also deals briefly with William Morris (1834-1896), who greatly influenced the attainment of today's level of protection of the environment in rural England.

Key Words : daily life, England, rural England, richness of life, environmental design

1. はじめに

英国の田舎町と日本の田舎町という語からくるイメージは大分違う。日本の田舎町からくるイメージは、自然と農耕地景色の優秀さが残っている所があるにもかかわらず、人々の作った町には、貧しい、質素、ダサイ、一語で表現すれば「貧」というイメージが浮かんでくる。最初にマイナス面のイメージがあり、中世あるいは近世からの固有の優れた伝統文化がある場合には良いイメージになって行くが、大都会より肯定的なイメージがあるとは思えない。一方、英国の田舎町の中でコッツウォルズ地方(Cotwolds)のいくつかの町を巡ってみて、大変驚くことは、「豊か」というイメージであった。日本の田舎町の貧に比して、英国の田舎町の豊かさには何があるのか、それを環境デザイ

ンの手法で解明してみようとするのが本研究である。

2. コッツウォルズ地方の紹介

日本で発売されているイギリスのガイドブックからコッツウォルズを引くと、次ぎのように書かれている。[注1]

「近年、人気上昇中の最もイギリスらしい田舎、ロンドンから西へ200km、イギリスで最もイギリスらしいカンントリーサイドの風景が残っている。なだらかな緑の丘陵地帯の中に、点在する村々には何百年も前の姿をそのまま残す建物も少なくない。ロンドンの人々は好んでこの地で休暇を過ごす。(中略)かつてウイリアム・モリスが『この世の天国』と呼んだケルムスコット村、『イギリスで一番美しい村』と言っ

たバイブリーの村などがあり、イギリス人の心の故郷といった趣きがある。標高150m～250mの丘が続く丘陵地帯は、東にオックスフォード、西にチェルトナム、南にバース、北にストラットフォード・アッポン・エイボンに囲まれている。(中略) 家々はライムストーンという薄茶色の石で造られ、『はちみつ色の村』とも呼ばれている。土地で採れる石を使うため、各村により微妙に異なる色合いが楽しめる。

コッツウォルズとは、古い英語で“羊小屋のある丘”という意味である。その名のとおりかつては広大な草原を利用したウールの産地として栄えた。19世紀に入り、イギリス各地の工業化が進むなか、この地方は石炭が採れないこと等の理由から、鉄道が敷かれなかった。そのため外部との交流が少なく、今も牧歌的な風景と昔ながらの暮らしが残る。」

ガイドブックでは村々と表現されているが、バーフォード、ボートン・オン・ザ・ウォーター等は、明らかに町と表現した方が適当と思われる規模を持っている。実際は町と村が混在しているコッツウォルズ地方である。

筆者の回った町村は、ブロックソム (Bloxham)、バーフォード (Burford)、ケルムスコット (Kelmescot)、ファリンドン (Faringdon)、バイブリー (Bibury)、ボートン・オン・ザ・ウォーター (Bourton-on-the-Water) であった。コッツウォルズ地方の約半分である。

3. コッツウォルズ地方の魅力

前文にある様に、この地方は鉄道がないので、効率良く回るために、レンタカーをオックスフォードで借りることにした。オックスフォード駅からかなり離れた不便な場所にレンタカー事務所はあるのだが、着いてみると先客がいた。不便を克服して中年の日本女性4人組一行が、すでにレンタカー手続きをしていた。一行はまずバースやイングリッシュ・ガーデンを

見て、マナーハウスに泊まると言う。係員の話す英語がうまく理解できず苦勞していたが、そうまでして訪れてみたい魅力がコッツウォルズにはあるものと確信した。数日後筆者が調査を終了し、車を返しにレンタカー事務所に入ると、別の日本女性中年4人組が借りる手続きをしていた。4泊の旅をし、マナーハウスに泊まると言う。レンタカー事務所の英国人にどの位の日本人が来るのか尋ねると、夏には毎日3組の客が来るという。かくも日本人に今必要とされている何かが、このコッツウォルズにはある。

3-1 ブロックソム (Bloxham)、の魅力

広くはない2車線の A361 国道を進んでいると、古くからの歴史を感じさせる町に着いた。国道をゆるやかに登る頂みねの左側に教会の尖った塔が遠くから遠望できた。昔の旅人もこの町を通りながらと見てきた印象深い風景であっただろうと思われる。しかしこの町はガイドブックにも載っていない無名の町である。教会の手前に二又道があり、二又が造る空地が緑地になっている。芝生が植えられ、町の標識を兼ねた石彫像があり、ベンチや花、小木が植えられていた (図1)。広場から見て、国道の向こう側には、樹木が赤い花を付けて印象的である。樹木の周りも公共の場所になっているように思える (図2)。この珍しい樹木も二又緑地もじっくり永い年月をかけて、住民の合意を得たであろう素朴なデザイン上の配慮が感じられる。

二又緑地と教会までの間に民家があり、これまた配慮の上に植えられたであろうバラが年月を経て玄関脇の壁を白い花をいっぱい付けて広がっていた (図3)。住民の樹木、花、バラに関する手間のかかった愛情に感心する。別に難解な作業をしているのではなく、居心地の良い住まいの環境を得るために、感覚を通して判断している住民の心を感じる。

図1 二又緑地（ブロックソム）

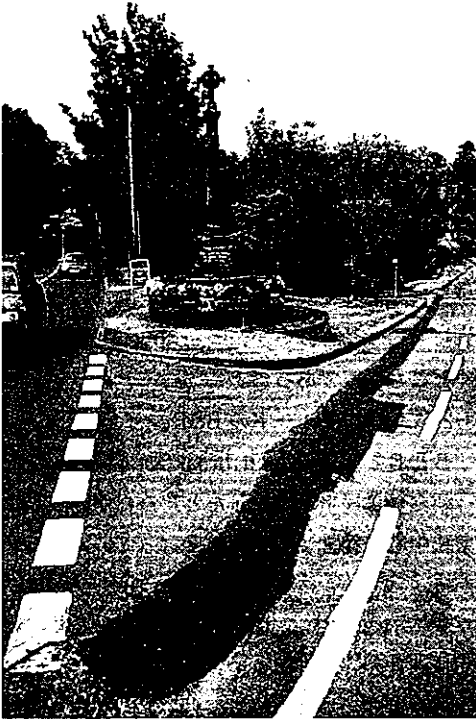


図2 樹木の周りも公共的場所（ブロックソム）

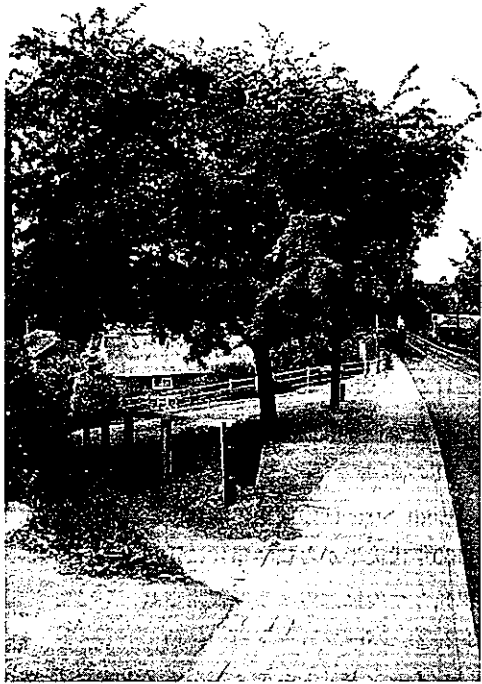


図3 パラ生け垣の民家（ブロックソム）



図4 ハイ・ストリート（バーフォード）



3-2 バーフォード (Burford)

坂道を登るようにメインのハイ・ストリート (High Street) (図4) が中央にある大きな町であった。ハイ・ストリートの両側に古く趣きのある3階立ての民家が立ち並び、それぞれが個性的にしかも調和を持って立ち連なってい

た。両脇の民家の一階は感じの良い商店やパブになっていて、それを見ながら平日にもかかわらず、多くの観光客がゆっくりと歩いているのであった。

3-2-① バーフォードの歴史

1999年発行のレイモンド・ムーディ 著の

「バーフォード」ガイド本 [注2] によると、バーフォードは900年以上前から町としての歴史をもっている。752年アングロ・サクソンの王達の戦場として Beor-ford と呼ばれる場所として出てくる。最初に正式に町の名が文献にあがってくるのは、1086年発行の土地台帳であり、そこには農村として人口約200人となっている。現在の人口は1000人を少し上回る程であるので、9世紀かけて5倍強の人口増になった。

この町は商いの町として発展し、かつては諸々の商品、薬屋、羊毛取り引き、又交通の要所として飲食を兼ねた旅館がいくつもあった。今日もパブレストランとして繁盛している旅館が目立つ。

町の中央を通っているハイ・ストリート (High Street) の両側の商店や旅館の建物は、1400年代後半から1500年代にかけて建設され、現在もその位置のまま使用されている。

3-2-② バーフォード道の価値

レイモンド・ムーディ著のガイド本にも1500年代以降にハイ・ストリートが拡幅されたとは書かれていない。そのハイ・ストリートは目測したところ車道4車線分約8m幅に、約8m幅ずつの歩道が両側にあるので、全幅約24mの道路幅である。これが500年以上前に造られ、現在でも十分対応できる機能的広さと美しさを兼務していることは驚きである。500年以上前と言えば、日本では室町時代末期である。その昔のバーフォードのメインストリートには、運搬用の荷車や馬を止めておく幅ひろい荷車おき場、人々の通行や立ち話、物品を運ぶ十分な広さの歩道が必要であると判断したのであろう。馬に代わって現在は車が駐車しているが、今でも適用する当時の合理機能的な判断力と空間美的な判断力に感心する。

一方ハイ・ストリートの中間部に時計が目印のトルシー郷土博物館 (Tolsey Museum) がある。そこから直角に曲がるシープ・ストリー

ト (Sheep Street) は斜面地を横切っているので、道路と接する斜面の上方向を住宅が占めている。シープ・ストリートから住宅までは、よく手入れされた広い緑地を前庭的に持っており、ゆったりとした良好な環境をかたち作っている。道路の下方向に位置する三つのホテルは道路から直ぐに立っているものの、やはり16世紀、17世紀に建てられた品のある建築物に月桂樹や、ツタ、バラが壁面を覆い、趣きの深い環境を作り出している。思わず泊まりたいと思う気持ちにさせられるが、尋ねてみると、あいにくどこも満室であった。

3-2-③ バーフォードの B&B

B & B とは Bed and breakfast の省略形で「朝食つき民宿」といったところだが、実際は家族中心で経営する小旅館と言っている。料金が安くて重宝するが、筆者の泊まったバーフォードの B&B は内装が可愛く、美しく、居心地が良かった (図5・6)。しかも建物は500才だと言う。現在の持ち主の家系が歴代続いているのか聞きそびれたが、1999年発行のレイモンド・ムーディ著の「バーフォード」ガイド本の表紙にハイ・ストリートの写真が印刷されていて、そこにこの B & B が写っているのである。そこには HOTEL の看板がかかげられ、隣のレストランには FOR SALE の看板も付いていた。今でも売りの看板がバーフォードの町に見うけられる事をみると、住民は適当に入れ代わっていると判断される。

さて、この B & B は最近改装したものと思われる。内装が美しく、磨きがかかっている、壁紙、便所、湯舟の施設が新しい。金属金具の部分はピカピカに磨きがかかっていた。それと相乗効果として、旅人を感心させるのは、500年もの歳月がかもしだすふところの深さだ。ただ古いだけでは不足である。汚い、床が傾斜している、ミシミシ音がする。お湯が出ない、居心地が悪い、のクレームがでるであろう。これが

家主の美的センスと、気持ちよく泊まってもらいたいという改造や配慮を通して、室に換えたのだ。

3-3 バイブリー (Bibury)

ウィリアム・モリスが「イギリスで一番美しい村」と述べた村である。確かに美しく、村の前をコルン川 (River Coln) (図7) の清く澄んだ清流が流れ、鱒がゆっくり泳いでいる。道端に止めてある車と、観光客の服装が現代のラブなものでなければ、100年前のモリスの時代と一緒に思える。この小さな村にはスワンホテル (The Swan Hotel) という大変有名なホテルとマナーハウスであるバイブリー・コート・ホテル (Bibury Court Hotel) がある。バイブリー・コート・ホテルの門からは広大な芝生の庭園があり、まさしく領主の気分になれる。レンタカー事務所であつた日本女性4人組一行も、コッツウォルズに点在しているこれらのマ

ナーハウスに泊まるのであろう。日本人の若いカップルも見受けられた。この環境こそ、日本では決して接することの出来ない空間環境であり、日本人には空間学習である。1泊1人113ポンド (約1.8万円) であり、2人で1室に泊まれば一人当たり1万円程で泊れる。

しかし、ここは豪勢すぎて庶民の実生活が感じられず筆者にはしっくりいかない。

3-4 ボートン・オン・ザ・ウォーター (Bourton-on-the-Water)

町の中央をウインドラッシュ川 (River Windrush) が流れている (図8)。テムズ河の上流になるこの川は、川幅広くとうとうと、しかも透き通った清流が流れている。川には鴨のつがいが人を恐れることなく泳ぎ、川べりの芝生でも毛づくろいをしている。ここも絵になる風景に満ちている。

図5 左の白い建物がB&B (バーフォード)



図6 B&Bの室内 (バーフォード)



図7 コルン川とスワンホテル (バイブリー)



図8 (ボートン・オン・ザ・ウォーター)



4. ウィリアム・モリスと田舎環境の関係

近代デザインを先導した人物として、ウィリアム・モリス (William Morris 1834-1896) は著名である [注3]。モリスと田舎環境との結び付きは、生まれた時からだった。まだ田園風景の濃いロンドン東の郊外の村落、ウォルサムストウ (Walthamstow) のクレイ・ヒルの19世紀はじめに建てられた「エルムハウス」で生まれた。特に6才の時、ウォルサムストウより少し東にあるウッドフォード・ホールに転居することになった。エッピングの森に隣接した50エーカ (約6万坪) の庭園と、100エーカの農場付き大邸宅であった。少年期のモリスは、完璧な田園生活を経験することができたのだと伝記作家たちは強調している。森林、牧草地、畑。乗馬、狩猟。手作りの乳製品、自家製の穀物、野菜、草花との付き合いの出来た少年時代であった [注4]。

ここで注目したいのは、モリスが生まれた時から田舎環境に居たことは、彼の父親が田舎好きであったということだ。いや、モリスの父親だけではなく、イギリス人自身が田舎 (カントリー) 好きの傾向があった。この当時の地方選出の国会議員達は領主が多く、彼等は議会が終わると、直ぐに自分のカントリーに帰って、楽しむ傾向があった。田舎には広大な芝生上でゴルフやクリケットを楽しむことができたであろうし、何よりも子供時代から接して来た、大都会では得られない自然の美しさの中に身を置けたことであろう。

事業に大成功をおさめたモリスの父親は、頻りにロンドンの中心まで出勤しなければならなかったもので、地方の議員よりも近くの田舎である、ウォルサムストウに住処を確保したのである。現在においても、ロンドンを職場とするイギリス人は、経済的な余裕が持てれば、郊外に居を構えたがる。モリスの父親と同じである。モリス自信も田舎への根強い愛着を一生持ち続

けた男であった [注4]。

4-1. モリスとコッシウォルズ地方の関係

オックスフォードで大学生活を送った後、1859年4月ジェーン・バーデンと結婚して12年後の1871年モリス37才の時、オックスフォードシャのケルムスコット村にある1570年頃建設された荘園邸宅を親友の画家であるロセッティーと共に賃貸し、妻のジェーンと2人の娘と共にモリス一家は、週末や夏の休暇にはロンドンを離れて、この別荘で過ごしたのだった。これが彼の著者である「ユートピアだより」で表紙絵として有名になった「ケルムスコット・マナーハウス」である。

「ケルムスコット・マナーハウスはモリスの心の拠りどころとなり、可能な限り訪れては、趣味の釣りに耽ったり、庭園や周囲の田園風景を満喫した。」と記述されている [注5]。

筆者が訪れた6月中旬には、ケルムスコット・マナーハウスには、バラが咲き、東北面の庭園には花が一面に咲き乱れていた。植物の中には1874年に壁紙のデザインとして描かれたアカンサスが目撃された。又1875年から始めているパターンデザインに出てくる多くの植物や花は、ケルムスコット・マナーハウスの庭園からデッサンされたであろうと推察される。

さらにコッツウォルズの周辺の村にある、グレート・コクスウェルの穀物倉庫の美しさを絶賛し、パイブリーの村を何度も訪れ、「イギリスで一番美しい村」と言ったことが、今日、モリスが言ったということで、価値になっている。

4-2. モリスの業績と田舎との関係

田舎はモリスに多大な幸と思考を与えた。モリスの生きた1000年もの前から田舎は自らの素晴らしさを築きつつあったからである。それを築いてきた人々の職人仕事の集積から中世の手

仕事の素晴らしさを取り上げた「アーツ&クラフツ運動」[注3]を引導しているし、修復を必要としている古い教会が壊されたり、12世紀～13世紀の初期イギリス式ゴシック様式への乱暴な改修を批判して、保存、修復の啓蒙と実践をおこなった「古建築保存協会（SPAB）」[注6]の中心人物の一人として活躍した。その思想はナショナル・トラストへ発展している[注7]。

さらにモリスの今日における田舎への業績として、適切な解説をしている長谷川堯氏の「建築逍遙」から引用してみよう[注8]。

「絵のように美しいケルムスコットの田園地帯の眺めは、おそらく、今から百年前に、モリスが眺めた光景とほとんど変わらないものだろう。なぜなら百年の時間の経過を物語るような人工物は、この眺めのなかにはほとんど何も目に入らないし、また百年の間に起こった田畑の荒廃、といった社会の近代化につきものといわれる現象も見られない。

たとえば日本の田舎で、100年前とまったく変わらないか、あるいはそれにほぼ同じといえるような田園風景を経験する為には、どこへ行けばいいのだろうか。と逆に考えずにはられない気持ちになってくる。

イギリスでは、このケルムスコットのような村に限らず、ほとんどの田園地帯(カントリー)でそれに近い経験をすることができる。いいかえれば、イギリスは19世紀以来、社会の近代化つまり工業化を世界に先駆けて実現するために、ロンドンに代表されるような大都会を生み出し、一方ではこうした大都市圏の形成に伴う都心や都市周辺環境の劣悪化、さらには田園の衰退といった深刻な社会問題を抱えていたはずなのだが、しかし、そのような傷痕は、現在の英国の国土にはほとんど残されていないように思える。要するにイギリスは、努力してそうした事態の出現を回避しようとし、防いできた

のである。そして、20世紀の英国において次第に定着していく、都市と田園の平和的共存という方向に対して、ウィリアム・モリスの言動は、間接、直接に大きな影響を与えたということをおぼろげに忘れるわけにはいかないのだ。」

つまりモリスは田舎が荒廃しない貢献をしたのであった。

5. 考察

コッツウォルズ地方を踏査して環境デザイン上の次の事が分かった。

- 1、住んでいる人の工夫の集積がある。
- 2、特別の技術ではない。
- 3、住民自身が感性を使いデザイン処理をしている。
- 4、住民に幸せな生活をしたい思いがある。
- 5、時間をかけて、デザインの吟味をしている。
- 6、他の良いものを良いと認め、応用している。
- 7、自然や人間に対しての愛情がある。

表1 環境デザイン関連 (作り手・筆者・事実)

作り手の行為	感じた現象	事 実
丁寧な作りと吟味	ゆったりしている	→ 適当な広がり
感覚を通して吟味	居心地の良さ	→ エレガンス
楽しんで作る	気が休まる	→ 自然で楽しい

筆者が「感じた現象」に対して、「作り手の行為」を分析し、「事実」はどうなっているかの関連を考察した。

- ①「ゆったりしている」と感じた現象に関して、住民としての作り手の行為は「丁寧な作りと吟味」を通して、空間を含めての「適当な広がり」の事実になり、居心地の良いものになっている。
- ②その「居心地の良さ」の感じは、作り手の行為としては、「自らの感覚を通して吟味」しており、自分の知覚意志がある。決定までに何回も感覚を巡らし、時間をかけて決定していると推察される。事実としては「エレガン

ス」に成長していて、気持ち良く感性に響く。

③「気持ちが休まる」と感じた現象に対しては、作り手は「楽しんで作っている」ので、事実として強制感のない「自然で楽しい」ものになる。

町、道路、建物、川、木、生け垣、花、芝生、の総合的な環境デザインについて、筆者の感じ方は「ゆったりしていて、居心地が良く、気が休まる」ものであった。これらは、永い時間をかけての、地元の職人や住民による人為的な「作り手の行為」の集積である。「作り手の行為」全般の上にたえず付く言葉は、「愛情を持って」である。愛情を持って、「丁寧な作り、感覚を通して、楽しんで、吟味」によってデザインされている。これらの住民による人為的環境デザインの集積は、「適当な広がり、エレガンスで自然観のある楽しい」ものとして存在している。こうしてコッツウォルズは人を引き付ける魅力的な田舎町になっている。

7. 結論

イギリス人は自然派で田舎好きな特徴はあるが、好きであるから黙っていても田舎に行くのではない。田舎には良質な環境があるから行くのである。コッツウォルズにわざわざ日本から多くの人が行くのは、まさにこの良質の環境デザインが今日の日本に無いから、好んで行くのである。

そのコッツウォルズの町村は特徴的な個性を最大限活かして町を作り上げていた。それは、著名な専門家ではなくて、地方の職人や住民が何年もかけて、我が町の環境を手塩にかけて作り上げた愛情から出発している。

ブロックソムは坂道と教会を注意深く結び付け、パーフォードも坂を有効に利用して町を作り、バイブリーとパーフォードは川を最大限に活かした町づくりをしている。

壁を飾るバラ、生け垣、庭の花、緑地広場の

あり方、B&Bの内装等は、コンサルタントを使用している事も考えられるが、住民や家主の知恵やセンスが強く作用していることは確かであろう。生活の芸術化は人々の良い環境で居心地の良い暮らしをしたい願望から生まれている。自然及び人間への愛情意識も重要である。

日本で良質の環境デザインを得たいと思うなら、生活者自らが、愛情を持って、居心地の良い住み環境を望み、感覚を通して、デザインをし、吟味をして、形造ることである。そこから永い集積の中で、良質の環境デザインは育ってくる。

注および参考文献

- 1 「個人旅行イギリス」 昭文社 242 2001
 - 2 Raymond Moody 著 「BURFORD」 *Hindsight of Burford* 5-28 1999
 - 3 アーツ&クラフツ運動 (Arts and Crafts Movement) において、「手仕事による美術・工芸運動」の指導的役割をモリス果たしている。中世からの職人仕事に価値を認めた。「手仕事による」ものは職人仕事であり芸術ではないとする、当時の常識に対して、職人仕事の優れたものは芸術に値すると提唱し、後に続く近代デザインの発展のきっかけを作った。
 - 4 長谷川堯著「建築遺逸」 平凡社 28-30 1990
 - 5 リンダ・パリー編「ウィリアム・モリス」 河出書房新社 19 1998
 - 6 フィリップ・ヘンダーソン著 「ウィリアム・モリス伝」 晶文社 299-300 1990
- 古建築物保護協会 (Society for the Protection of Ancient Buildings 略称 SPAB)。モリスがパーフォード教会の取り壊し中を目にして、「アシニースム」の1877年3月5日号に激しい調子の投書を寄せた。これがきっかけでSPABは発足する。

- 7 「マイベディア」 日立デジタル平凡社
1999
正称は（歴史的名勝地および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト The National Trust for historic Interest and Natural Beauty）。良好な自然や歴史的環境を守るため、広く国民寄付を募ってその土地の取得・管理等を行う運動。またその運動を進める民間組織。1895年イギリスで3人の市民の話し合いから設立され、1907年（ナショナル・トラスト法）が制定された。
- 8 長谷川亮著「建築逍遥」 平凡社 48-49
1990